

図書館の人は著述をしないという話があります。何か著述しようと思うと、関係の本がワンサとあって、大抵のものは著述してあるというのです。その上に私がこんなものを書いたって、これに及ぶものは書けない。また、こんなに沢山のものを見なければならぬと思うと、圧倒されてしまう。どんなものでも、ない本はないので、嫌になってしまふから、書かないほうがいいという話があります。私どものように、商売として書いている人間から見ると、型というものは大抵知っているわけです。その目で今の現代書といわれるものを見ると、実は大抵誰かのこしらえたものをなぞっている。下敷を入れておいて、その上からなぞっている。そのなぞり方が少し荒っぽかったり、少し弱かったり、あるいは少し脱線気味だったりというところから、何かフレッシュのように見える。フレッシュなものというのについて、私どもが一番惧れるのは、自分が書くかと思うものの中に、ああいうものを参考にして書くかと思つて、一生懸命惚れて臨書するんです。そうすると、自然にみんなに書いてあげるものの中に、今関心を持つているものが、つい影響してくるわけです。それが書いているうちに馴れて、きまりきつてひどく陳腐になつてしまふ。もうこんなものはこりごりだ。そこでむかし陳腐だといわれたものをもう一遍取り出してまた習い出してみると陳腐どころじゃない。そのほうが余程評価が高かったりする。そういうふうにして取り替えてみると、あの先生は、このごろ変わったものを書き出したが創作性があるなどといわれたりすることが、そうじゃなく、王羲之の頭などをなでたりしているということ、別に何でもなし。大層フレッシュのように見えても、何かしら今の人が忘却しているようなものを、ちよつと上からなぞつてみると目新しく見える。いつでも目新しく見えるものを展覧会の中で見据えてくる。見据えてきた目で、あれは何だったかを見ると、ああ、あれは何々だったかというような事です。ただ少々意外なものを

やっているだけなんです。意外というのは、みんなが忘却しているものに目を付ける。だからご覧なさい。そういう人は何かいうとすぐ馬脚を現して賞め出すでしょう。何の銘は素晴らしいなんていい出すから、ああ、種本はその辺りにあるんだなあと思う。それは大変得難いものかという何でもない。印刷物でも見ているうちに、その人が目新しく感じたものを、その目新しく感じた感覚で書くわけです。このところが大事なんです。創作か、創作でないかの違いはそこだと思ふ。目新しく感じたところに心の動きがあつたわけです。その目新しく感じた目でなぞつてみると、たしかに目新しい。ところが、年中傍にあるけれども、陳腐だと思つて見ていると陳腐になつてしまふ。目新しく感じたという時に、何か火花が出たわけですから、その火花が出た瞬間のところの吐く息、吸う息でそれを捉えてくると、大抵のものは、もう一遍生命を吹き返します。いちばん大事なのは、目新しい目で、絶えずものを見ていられる人が天才なんです。このところがインスピレーションとでもいう大事などころなんです。見ていてハツとものに感じる習慣を付けなければいけない。感激のないところのものには生まれません。まして芸術などというならば、見ている時に、ああ、そうだこれ書いてみたいなあという——。意欲が鋭く働く。それは自分がその対象に新しい息吹を与えたわけです。古典とかいう言葉、古いとかいうけれども、徳川時分のところをもう一度見てごらんください。たとえばひとつの例ですが、角倉素庵という人があります。この間もちよつと京都に旅行して二尊院に立寄り、角倉素庵の墓を見て、そうそう家に素庵の書があつたなアと思ひ出して、帰つてから久々に素庵の書いた肉筆を出してみたわけです。何ともそれが新鮮なんです。ねえ。徳川時分の貿易業者で学問があつたので有名ですが、「角倉本」という極上の本もたくさん出ています。(つづく)